



Trade-Wind Otaboku Nobels

みずほ ママ
少年はお母さまに恋してる

十五年目の鎮魂歌
レクイエム

菅野たくみ

Trade-Wind

もくじ

プロローグ・聖女の亡霊	6
孤児の女優	17
十条の系譜	40
エピソード・少年の現実	74
あとがき	78

梅雨の合間、少し控えめな日差しが桜並木を縫って湿った石畳を優しく照らしている。昨夜の雨に濡れた桜の青葉が雫をきらきらと光らせながら、鮮やかな緑色を透かして揺れている。校舎までの短い桜並木に、少女達の黄色い笑い声と軽い靴音が弾むように響いている。その光景は、とても清純で美しく、清々しい。

ここは、恵泉女学院。

明治一九年に創設された由緒ある女学院。日本の近代化にあわせ、女性にもふさわしい教養を学ぶ場が必要だ、という理念に基づいて創立される。

英国のパブリックスクールを原型として、キリスト基督教的なシステムを取り入れた教育様式は現在まで連綿と受け継がれている、いわゆる『お嬢さま学校』である。

戦後再建時に幼稚園から女子大学院までの一貫教育施設となるが、その基本的なスタイルは現在も変わらない。

モットーは慈悲と寛容。年間行事には奉仕活動やキリスト教礼拝など、宗教色も色濃い。それに加えて日本的な礼節・情緒教育も行われているため、ふつうの義務教育機関とはいささか趣が異なる点が多い。

生徒の自主性を尊重するため服装規定等校則もゆるいた、徹底した情操教育によるものか、生徒内自治がある程度効果を上げており、大幅な校則違反はほぼ見受けられることはない。それだけに、若干世間から隔絶した感もある。

十二月二十四日。

キリスト生誕の前日として広く祝われるこの日、人間として十六年と九ヶ月、幽霊として五ヶ月を生きた、高島一子ちゃんが、この世との別れを果たした。

「一子ちゃん……」

彼女の存在は、僕の中でとても大きかった。

頬を流れる生ぬるい液体と、無駄に苦しい呼吸が、そのことをはっきりと物語っていた。笑わなきゃいけないのに。

一子ちゃんに心配かけちゃいけないのに。

二十二年の時を経て天に召される彼女を、最高の笑顔で送らなきゃいけないのに。僕の理性と本能は、それを許してくれなくて。

あふれてくる悲しみを体の外へ出すことしか考えられなくて。

お嬢さまとしての体裁なんか、保っている余裕はどこにもなくて。

数分前に消えた、もともと幻想である暖かさを思い出しながら、僕は、ただその場で泣いていた。

プロローグ・聖女の亡霊

いい加減、涙も涸れて、泣いているのもばからしくなった頃。
僕は、目の前に幻影を見た。

毎朝、見飽きているはずの僕の姿をした半透明が、聖母のような微笑みを浮かべながら、僕を見ている。

その半透明が何を意味するかは、一子ちゃんとの長い生活の中で自然に理解できた。

幽霊。

生物と物質の支配するこの世界において、生物であつた過去を持ち、物質にあらず、ただ意志を持つてさまよう精神体。

けれど、僕はここににいるのに、なんで？

「一子を、ありがとう……」

その幽霊が僕に語りかけてくる。

まさか。

「母様？」

僕の問いかけに、幽霊　母様は、その半透明な姿を完全な透明へと変えながら、ゆつくりと頷く。

「瑞穂、私の娘」

「ちよつと待てやつ！」

母様の暴言に、僕は感動的なシーンを思わずぶち壊してしまつ。

すると、母様の姿が、普段一子ちゃんが過ごしていた程度の不透明度を取り戻す。

「あら、しばらく時間が出来たようね」

これで瑞穂とゆつくりお話しが出来るわ、そう言つて母様は僕のことを、じつくりと見回す。

「完璧ね、こんなに女の子らしく育ってくれてお母さん嬉しいわ」

「異議あり」

「えー、こんなに可愛いのに」

「母様、ご自分そっくりの顔を可愛いとは、ずいぶんナルシストですね」

「あら、私の学生時代はこんなに可愛くなかつたわよ」

自分でも、少しずつ顔が引きつるのがわかる。このふてぶてしさ、さすがは僕を恵泉女学院に送りつけた鎬木光久の義娘。

「それにしても本当に可愛いわ、娘とはいえ嫉妬しちゃう」

「母様、ですから」

「えいつ」

半透明の幻影が、僕の体に抱きついてくる。

「ひゃっ！」

物質の世界に干渉できないはずの母様の体は、しかし僕の体に確かな密着感をもたらす。一子ちゃんのときもそうだったが、幽霊は物質に干渉できないものの、人間には干渉できる。

「可愛い 反応といい、抱き心地といい、すばらしいわ」

その言葉に、僕は反論できない。というよりは、女性特有の胸の膨らみをダイレクトに感じてしまい、意識がそっちに取られてしまう。

憧憬の対象として祭り上げられたエルダー相手にボディコミュニケーションできる生徒なんて、前任のエルダーだった紫苑さんくらいしかないわけで。僕は、この感触には相変わらず慣れていたかった。

「お、母様、当たってます」

「あててんのよ」

「ちよつと、母様」

「 って言うのもいいけど、女同士で気にするものかどうかと思っわよ」

「ですから」

「うーん、ぴちぴちの肌、若い娘はいいわねえ」

「自分の息子で遊ぶなっ！」

「女の子にそんなモノ、あるわけないじゃない」

「下ネタに逃げるなあ！」

久々に怒鳴ると、思った以上に体力を使うようで、僕はたったこれだけのやりとりで、肩で息をするまでに苦しくなっていた。

「……でも、本当に大きくなったわね」

「母様……」

「十五年くらい瑞穂の背後霊をしていたけれど、ここ半年の一子以外、全部世界がぼやけてしか見えなくて」

せめて守護霊って言つてよ母様。

「だから今、瑞穂をはつきりと見ることが出来て、私は嬉しいのよ」

十五年ぶり。

三歳の次は十八歳。

その間、母様は、ずっと正体のないぼやけた世界の中で、僕の幸せを祈っていてくれた。

僕の苦しみは、父様が、楓さんが、お祖父様が、まりやが、紫苑さんが、奏ちゃんが、由佳里ちゃんが、救ってくれた。けれど、母様は違つ。十五年間、共に眠る相手もなく、分かり合える相手もなく、認識できる風景もなく、聞こえてくるべき声もなく、花の香りを楽しむこともなく、触れたいものに触れることもなく、食べる楽しみを体験することもなく、ただ、僕のために祈ってくれていた。

十五年間の苦しみと、それを通り抜けた今の喜びは、きっと僕なんかが言葉にしていけない小さなものじゃない。

そんな母様の思いに、どう答えればいいのだろうか。

そんな、十五年間ずっと考えていたことを、僕はもう一度、考えることにした。

「母様」

母様のために何ができるか。

その問いに、最後に僕が出した結論。

「僕の思い出を、まずひとつお話しします」

それは、母様の一人息子である僕が、この十五年間で何を思い、何を話し、そして何を見てきたのかを、一つずつ、ゆっくりと母様に伝えること。

「そうしたら、母様の思い出を、一つお聞かせ下さい」

そして、母様が過ごされた日々を、一つでも多く僕の心に刻み込むこと。

「いかがでしょうか、母様」

「そうね、聞かせてちょうだい」

母様の優しい笑顔に促されて、僕は一言目を発しようと思った。そのとき、気まぐれに吹いたそよ風が、僕の体温を一気に奪う。

「寒っ」

思わず声を出してしまふ。

母様の心配そうな表情に、僕は大丈夫、と一声かけて、

「移動しながらで良いですか？」

と、母様に断る。

「もちろんよ、瑞穂が寒くないところで話を聞かせてちょうだい」

母様の返事がとても暖かい。けれど、同じ寒さを共有できないのは、少しだけ寂しい。そんなことを思いながら、寮への道を歩き始める。

母様が付いてきていることを確認しようと、振り返ると。

ひらひらと舞う牡丹雪と、それに彩られた白い桜の木々が、僕の母様を、神々しく飾り立てていた。

道すがら、一つ目の話を始めようと、僕は母様と並ぶ。

「母様、小さい頃から、ずっとこうやって歩くのに、僕はあこがれていたんですよ」

「あら、嬉しいわね」

「嬉しいと思う前に、少しでも生きながらえる努力をして欲しかったです、僕は」

「ごめんなさいね、けれど耐えられなかったのよ」

母様の顔が沈む。

「瑞穂や慶行さんには悪かったけれど、父様と母様からいただいた体に、メスを入れたくなかったのよ」

母様の言葉を聞きながら、僕はなんとなく思う。

「つまり、その決心を覆させるだけの説得を出来なかった父様が原因なわけですね」

このとき、僕は紫苑さんのことを思い出していた。

病気が原因で一年を無駄にした気持ちはどんなものだったのだろうか。

その病名が何なのか、少なくとも僕は知らない。そして、その病気が治っている可能性は限りなく低い。

けれど、紫苑さんが母様と同じ考えだとするならば、遠からず、紫苑さんの訃報が聞こえてくるかも知れない。

いや。

きっと、身元を隠している僕に訃報が届くことはないだろう。風の噂で紫苑さんの死を知り、確かめることも出来ずに落ち込むだけに違いない。

けれど、もし、もしも僕が紫苑さんの、たった一人になれたなら。きっと、僕は紫苑さんと二人で歩むことを考える。父様のように、思い出だけにすがって生きるなんて嫌だから。僕の子供が、僕のように母親のことを知らないなんて耐えられないから。

「ふふーん、そういうこと……」

母様が、今度は小悪魔のような

紫苑さんと同じ種類の

微笑みで、僕の表情を読む。

「最後の話は、とても楽しい話になりそうね」

最後の話。

いつかはやってくるであろうその話を意識すると、僕の背筋に少しだけ寒気が走り、涙腺が少しだけ緩くなったような気がした。

母様は、僕の様子に驚いたのか、

「けれど、まずは最初の話をしてくれないと始まらないわね」

と、微笑みながら僕に話しかけてくれた。

そうだ、僕は母様に、今までのことを全部伝えるんだ。

その目的をもう一度思い出し、僕は最初の話 시작했다。

あれは、僕が小学校五年生くらいだっただろうか。

その日は、父兄参観だった。

「それじゃあ、今日は宿題を発表してもらおう。人生の標語、覚えてるね？」

普段なら宿題をやってこない人も多いが、今日ばかりは誰一人として宿題忘れはいない。

それもそのはず、誰だって宿題を忘れて怒られるところを、ご両親に見られたくはないだ

ろう。

けれど。

僕の両親は、この場にいない。

父様は、いつものとおり仕事。父兄参観に参加したいとは言っていたけれど、経営の父・鎬木光久の息子ゆえか、何かと忙しいようで、今朝も準備していたところをいきなり電話で呼び出された。電話口で、怒ってみたり情けない声を出してみたりはしていたけれど、結局は電話してる人に言いくるめられた。

電話を持ちながらくずおれる父様の姿は、見ていて非常に情けないものがあつた。スポットライトにファンシーな書き文字が似合う、言ってみればある意味シニールな光景。

「瑞穂、ごめん……」

父様の弱々しい声が、なんだか少しだけおかしかったのは、今朝のことだった。

そして、言うまでもないことだけれど、母様はこのとき、すでに亡くなっている。母様が亡くなったのは、僕が三歳の頃だった。

父様からは母様の話をよく聞くし、使用人の人たちも、母様はすばらしい方だったと口をそろえて言う。

けれど、僕はそのことを全く知らない。三歳という年齢は、性格を形作るには十分の記憶を得ているかも知れないけれど、たくさんの思い出を残すには幼すぎた。

そして、僕はこんなときいつも思う。
母様が生きていてくれたら、と。

「好きこそものの上手なれ……好きなことだから、一杯勉強して、練習して、がんばれば、上手になって、もつと好きになる。すぐく素敵だと思っています」

「乾坤一擲……その一瞬に全力を尽くすという意味です。何より、すぐく難しい漢字が格好良いと思います」

ひとりひとりの発表が終わるたび、その子のお母さんは嬉しそうにしたり、恥ずかしそうに下を向いたりする。

そんな様子を、僕はとても羨ましく思う。

「次は鍋木君、どうぞ」

「はい」

立ち上がった、僕はノートの文字を、見る。

「思い出より、生きたお母さん」

僕の一言に、クラスの人は全員絶句した。静寂の中、僕は言葉を続ける。

「どんなに優れた人でも、死んでしまっただけは意味がありません。みんなのお母さんのように、生きていて、ここに来てくれて、見てくれる。そんなお母さんが、僕も欲しかったです」

それだけを言い終えて、僕は椅子に座る。静寂によって呪われた空気は、ずっと重いままである。

「みなさんは、嫡木君のぶんも、お母さんを大切にしないといけませんね」

先生のコメントは、この沈黙を終わらせるための方便だったような気がする。その後の発表は、僕には聞こえていなかった。

「短い話でしたけど、いかがでしたか？」

「最初から恨み言？ 瑞穂もなかなかやるわね」

感想を言う母様の声が、仕草が、そして表情が、まりやとつるんで僕をからかっているとき、紫苑さんに重なる。

「それじゃ次は私、と言う前に、お茶でもいれてもらおうかしら？」

気が付くと、寮が目の前にあった。

孤児の女優

目の前の門をくぐると、そこは同潤会アパートの風貌をした、シックな学生寮だった。毎日目にしているこの学生寮も、母様と一緒にと言っただけで、なんだか新しいものに見えてしまふ。

寮の敷居をまたぐ（一子ちゃんは僕の体で敷居を踏んでいたけれど、そんなことを母様の前でできるわけがない）と、母様が懐かしいと言いたげな表情で、辺りを見回す。

「変わってないわね、ここは」

「ええ、母様の部屋もほとんど変わっていないはずですよ」

今は僕が使っているんですけどね、と一言足すと、

「こら、瑞穂ちゃん！ 僕なんて言っちゃダメでしょうか」

どこから湧いて出たのか、まりやが目の前にいた。

「……」

まりやを見つめる母様。その表情から読みとれるのは、懐かしさといとおしさ。逆に、まりやの目は点になっていて、現状を把握できていないようだ。

「あれ？ 瑞穂ちゃんがふたり？」

「いんや、これは享年二十五歳にもなつて女学校の制服着てる痛い幽霊」

「ふーん、一子ちゃんみたいなものか」

やっと事情のつかめたまりやが母様に向かい合った瞬間。

「夜羽お姉さまっつ！」
よはね

母様が、一切の予備動作もなくまりやに抱きついた。その様子は、さながら一子ちゃんのように。

なるほど、一子ちゃん是这样やって抱きつき方を覚えてしまったわけだ。

「えっ？　なんでこの幽霊、母様の名前知ってるの？」

まりやが疑問を口にする。

っていうか、おばさまのお名前、英語にしたらジョンですか。道理ですつと名前を教えただけなかったはずだ。

こんなところで長年の疑問が二つ同時に晴れようとは思わなかった。

「あら？」

まりやの面食らった反応を見て、母様の暴走が止まる。

「母様、世代が違います」

「そうだったわね、ごめんなさい、まりやちゃん」

それにしても大きくなったわね、と母様はその姿に見合わないおばさんらしい科白を口にする。

「んで、瑞穂ちゃんは主張するわけだ、この幽霊が幸穂おばさまだと」

「うん、一応」

「一応じゃないでしょう瑞穂、久しぶりなんだからちゃんと紹介し直してくれないと」
そんな空気じゃありません母様。と言いたところだが、まりやが一足先に母様の言葉に従う。

「おばさまがお望みでしたら、改めて自己紹介をさせていただきますわ。私は、旧姓鍋木夜羽が娘、御門まりやです。以後お見知り置きを」

「ええ、鍋木幸穂です、よろしくね」

そう言つて微笑む母様の表情の柔らさに、まりやも何か感じるところがあつたらしい。

（ねえ、瑞穂ちゃん）

「どうしたの？」

（幸穂おばさまって、どんだけお嬢さまだったのよ！ 下手したら紫苑さまよりクオリティ高いじゃない）

「まあ、六年分くらいは？」

「そこ、何を若い者同士でいちやいちやと……そりゃ、私だって夜羽お姉さまとか一子とか、そういうロマンスがあつただけ」

「いや、その りくつは おかしい」

僕とまりやは同時に突っ込む。

「それなんてエロゲですか、女子校とはいえ、仮にも女性同士なんですよ」

「第五十代のエルダーが、たった二人の相手しかない理由がありません」

しかし、その主張は全く逆のものだった。

「ま、まりや？」

「瑞穂ちゃん、このくらい気が付かなかったの？」

去年のエルダーである紫苑さまがべつたりじゃなかったら、今頃何人に食べられていたか分からないわね。そんなまりやの言葉が、少し怖く感じたのと同時に、紫苑さんに守られてるといふ、絶対的な安心感が僕の胸を満たしてくれた。

「玄関で話し込むのも何だし、上がっちゃおう」

まりやの言葉に、僕は一旦待ったをかける。

「母様、一応旧姓の『宮小路』で名乗っていただいて良いですか？」

「ええ、嫡木と分かってしまつては大変ですものね」

簡単な解をとつた後、まりやに従つて、食堂へと足を運ぶ。テーブルには奏ちゃんが座っていた。夕食はもう終わっているからか、由佳里ちゃんはもう部屋に戻っているらしい。

「お帰らないませ、お姉さま……ふ、二人？」

こちらの様子に気が付いた奏ちゃんが、ひときわ大きな声を上げる。

「由佳里が来ると大変なことになりそうね、しばらく足止めしてくるわ」

「ありがと、まりや」

まりやが食堂を離れる。

この場にいるのは、非常識な幽霊を除けば僕と奏ちゃんだけ。

「夏服のお姉さまと冬服のお姉さまって、一体どういうことなんですか？」

奏ちゃんが、おびえる声を押し殺すように、ゆっくりと疑問を口にする。

奏ちゃんを落ち着かせるため、僕は事情の説明をはじめ

「「おびえさせてごめんなさいね」

なんで声がかぶるかなあ。

「こちらから紹介しますので、とりあえず母様は静かにしていただけますか」

「あらそう？ それじゃ、楽しみにしているわね」

母様をとりあえず黙らせておいてから、説明を続ける。

「奏ちゃん、こちらは幽霊だけに一子ちゃんのお姉さまの、宮小路幸穂さまよ」

「瑞穂、そういう説明をするの……」

「いいから挨拶する」

僕の言葉に、母様はしゅんとする。けれど、すぐに復活して、

「第五十代エルダー、宮小路幸穂です。よろしく願いますね」

と、奏ちゃんに完璧なお嬢さまっぷりを見せつける。

「で、こちらが今の一年生の周防院奏ちゃん。この恵泉における、私の一番大切な妹です」
「周防院奏なのです、よろしくお願いしますなのですよ」

奏ちゃんがびよこんと頭を下げる。その様子を、母様はなにやら真剣な目つきで見つめる。

「瑞穂、随分可愛い妹じゃないの」

真剣な目つきとふるえる手は、しかし奏ちゃんを警戒したものではなかった。

母様は、何かをこらえているらしい。その様子が、奏ちゃんに抱きつきたい状態の紫苑さんに、ひどくよく似ていて。

「奏ちゃん、幸穂お姉さまが奏ちゃんを抱き心地をお調べになりたいそうよ」

「はい、どうぞなのですよ」

奏ちゃんの笑顔と言葉が母様のストッパーを外したのだろう、母様は物理法則を無視して奏ちゃんに飛びつく。

いや、確かに物理法則なんて母様にとってはどうでもいい代物なんだろうけど、もう少しお嬢さまらしくしたらどうなのさ。

「ぎゅっ……ああ、すばらしい抱き心地だわ……」

「はやや、不思議なことにきつく抱きしめられてもそんなに苦しくないのですよ」
奏ちゃんの漏らす感想が、少し面白かった。

いや、確かに一子ちゃんが奏ちゃんにぎゅーとする場面は思いつかないんだけど。

「この抱き心地を、瑞穂は毎日堪能できるのね」

ちよ、ちよっと待って母様！ 勘ぐられるっ!!

「それが、あまり抱きしめてはくれないですよ」

奏ちゃんが、即座に答えを返す。

「事情が事情ですし、仕方がないとは思うのですけれど、奏は少し寂しいですよ」

「事情？」

「お姉さまは、紫苑お姉さま 同じクラスの上級生のお姉さまにぞっこんなのですよ」

……はい？

母様の相づちから奏ちゃんが示した答えは、想定の外だった。

えーっと、奏ちゃんの言葉を解釈すると、僕は紫苑さんを異性として好きだということになるわけなんだけど……けど、僕が一応女性を装っている以上、女の子同士の恋愛という形になるわけ……

やばっ、顔が熱くなってるのが分かる！

「あら、瑞穂、もしかして図星？」

「お姉さま、その様子は誰が見てもわかりやすいですよ」

二人して僕に注目する。恥ずかしいから止めて欲しいと言いたいが、それが逆効果なのは明

らかなので、取りあえず平静を装う。

「その『紫苑』さんって誰なの？ お母さんに紹介していただけないかしら？」

母様は、にやついた表情のまま、僕の目前に迫ってくる。

「え、えつと……」

どう紹介していいものか迷っていると、奏ちゃんがまた余計な一言を母様に告げる。

「紫苑お姉さまは、お姉さまのお嫁さんに一番ふさわしいと思うのですよ」

「お嫁さん？ それは母親として聞いておかなければいけないわね」

気づいていないのか、それともスルーできると考えているのか。母様は奏ちゃんの重大発言を軽く聞き流していたようだが、僕は聞き逃す訳にはいかない。

「か、奏ちゃん？」

僕の問いかけの意味を正確に理解したのか、奏ちゃんは、まりやと由佳里ちゃんが二階にいるすなわち、この会話を聞いていないことを確認する。もちろん、この時間には、すでに寮母さんはいらつしやらない。

確認が終わった時点で、奏ちゃんの口が開く。

「お姉さまが実は男の方だということくらい、奏はまるっとすりっとお見通しなのですよ」

まさか、そこまでの精度で正確だとは思いませんでした。

まるで人生が終わったかのように青ざめた顔の僕を後目に、奏ちゃんは、そこからさらに言

葉を紡ぐ。それはまるで、美しい吟遊詩人の奏でる恋の歌のようだった。

奏が、初めてお姉さまに出会ったとき。それは、夕方のことでした。

「奏ちゃん、新しい寮生が来てるから、お茶でも準備しておいて」

まりやお姉さまの言葉で、奏は台所に向かって、やかんを火に掛けたのです。やかんのお湯が沸くには時間が掛かりますから、奏はふと窓の外の景色を見たのです。

そうしたら、桜並木の向こう側で、去年のエルダーでみんなの憧れのお姉さまたる、紫苑お姉さまがどなたかとお話をしているようだったのです。

そのご様子が、とても美しく、楽しそうでしたから、奏は、悪いと思いながらも、紫苑お姉さまの視線の先を、探してしまったのです。

すると、そこには亜麻色の髪をした、紫苑お姉さまに負けず劣らず綺麗なお方がいらっしたのです。

奏はしばらくその方の背中を見ていましたが、ポットのお湯が沸いてしまいました。仕方なくその場を離れて、お茶の準備に戻ったのですが、あの背中忘れられなかったのです。

そして、そのとき、運命の女神のいたずらがあったのです。

普段使っている小さなトレイが、その日だけたまたま手の届かないところにあつたのです。だいぶサイズの大きいトレイが近くにあつたので、椅子を持ってこようか大きいトレイを使おう

うが一瞬だけ悩みましたが、大は小を兼ねると申します、せつかくだから奏はこの大きいトレイを選んだのです。

多少使いづらいなながらも、まりやお姉さまに教えられた新しい寮生の方のお部屋にティーセットを運べるならば問題はありません、奏はそのトレイで階段を上り始めましたが、ティーセットがトレイの上で暴れるのです。ゆっくり、ティーセットがトレイから落ちないように、一歩一歩バランスを取りながら階段を上がっていききました。

そのとき、ふとバランスが崩れる違和感がありました。一瞬遅れて、トレイが軽くなり、背中が誰か大きな人に支えられている感触を覚えました。

「びっくりさせてごめんなさいね、危ないから支えさせてもらったわ」

その声は、聞き覚えのない声で、まるで天使のお告げのように聞こえたのです。

「それにしても大きいお盆ね、使いづらくはなかった？」

亜麻色の髪をした天使さまは、先ほど紫苑お姉さまの視線の先にいたお方。そして、まりやお姉さまのおっしゃっていた、新しい寮生の方だったのです。

「それが奏ちゃんと瑞穂の出会いなのね、運命的だわ」

「幸穂お姉さま、ありがとうございます」

二人のやりとりに、僕は一切口を挟まない。

「それで、それから？」

「次は、疑惑その一、お姉さまが男性の方であるという証拠を集めるのですよ」

「どうやら、僕は所々で、大きなミスをやらかしていたらしい。奏ちゃん以外にばれてる要素がないといいなあ。」

それで、先ほど背中を支えて頂いたとき、腰のあたりに少し慣れない感触があつたのです。

「い、いきなり致命的ミス?!」

「けれど、奏は男の人がどうなっているのかを知りませんから、気のせいだった可能性も考えていたのですよ」

「そ、そうなの……」

その疑惑を口にしないなんて、いい子だ、とてもいい子だ。いや、確たる証拠をつかむことを考えていたなら、かえって性質が悪いという考えも？

その後、奏はお姉さまのお部屋にお邪魔したのです。

そのときには、お姉さまは奏のお世話を嫌がっていたようなのです。次にお茶を淹れに行つたときも同じでしたから、これは本当だと思うのです。

けれど、それで泣きそうになった奏を抱きしめてくれて、優しく声をかけてくれたので、奏はそれで満足なのです。

「奏ちゃんには悪いけれど、外部生なら怪しむのが普通の反応だからね。仕来りなんて言われても、慣れるまでには時間が掛かるわ」

そりゃ、いきなり後輩がお世話するなんて言ってきたら、男だとか女だとか関係なくとまどうに違いない。お嬢さま学校、それも歴史のある一貫校特有の習慣だとしても、けっして過言ではあるまい。

「そ、そうなの？」

僕の言葉に、母様まで驚く。まあ、母様は生粋のお嬢さまだったはずだから、その反応にも頷ける。

「幸穂さまもこうおっしゃっているのですけれど……」

「奏ちゃん、あれも内部生の意見だから」

お嬢さまっていうのは、やっぱりピントがずれてるものなのだろうか。

そして、翌日の朝。

「私？ 私が開正……」

お姉さまが何か言いよんどいたようでしたので、奏は思い切って揺さぶりを掛けてみただす。

「か、かいせいって……進学校の中ではトップクラスといわれている、あの開正学園ですかあつ?!」

もちろん、奏の頭の中には開正学園の他に、もう一つ選択肢がありました。

開正学院、全国の『トップクラス』と呼ばれる進学校の中でも頭一つ飛び抜けた、誰もが認める超エリート学校。

奏たちには区別のつかないほどのレベルの高い学校ですが、全国トップクラスの学校からみたら、その実力差はやはり一目瞭然だそうです。そして、この二つの学校には、ただ一つ、外から見て明確な違いがあります。

それは、開正学院が男子校であることです。

この反応で、お姉さまの性別がはつきりする。奏は、それを考えながら次の反応を待ちました。

「すごいでしょ、しかもこの子ってば学年でトップクラスの学力だったのよ」

この、何気ない、まりやお姉さまの答えが……何も間違っていないのに、なぜか、ちぐはぐな返答に聞こえたのです。

「奏ちゃんはすごいわね、たったそれだけで私が開正学院だったって見抜くなんて」

まりやの言葉がマルチブルアウトであることを見抜いた奏ちゃんは、やっぱり僕なんかとは比べものにならないほど鋭く、賢い。ただし、一瞬でミスが確定する知識 開正学園の生徒が母校を「開正」とは呼ばず、「開学」と呼ぶことを前提に、今まではわざと「開正……」と語尾を濁していたのだから。

「けれど、その日の午前中に、同じ反応をしたクラスメイトは、一様に開正学園だと思っていてくれたようだったけれど、どうなのかしら？」

僕は、同時に覚えた疑問を口にする。あれは転校初日のことだった。僕は、はつきりと覚えている。

「お姉さまは誰よりも女らしい方なのです、疑うだけの証拠を持っているのは奏だけなのですよ」

そういつて、奏ちゃんはにっこりと笑う。しかし、『雰囲気』だけで僕を疑い、そして転校初日にちよつとかまをかけただけで男と見抜いた人が一人いる。

「けれど、紫苑お姉さまは奏より早く見抜いていらっしやったらしいのです、尊敬するのですよ」

奏ちゃんは微笑んだまま、紫苑さんを褒め称える。けれど、その声は少し冷たく感じる。

「……お姉さまは、紫苑お姉さまにどんな『情報』をお与えになったのですか？」

なるほど、それが奏ちゃんの疑念か。

「いいえ、紫苑さんは一切の情報無く、たつたの一言でその事実を確信したのよ」

「そうでしたか……やっぱり、紫苑お姉さまには敵いません」

それが愛なのですね、奏ちゃんはその言つて、話を続ける。

モテる子が相手だと大変ね、そうつぶやく母様は奏ちゃんの気持ちを追っているのだろう、事実関係を論理的に解こうとしている僕とは、聴講者としての立場が違つて。

そして、奏ちゃんの言葉は続く。

とは言ひしても、それはあくまで九十九パーセントの疑いでしかありませんでした。

奏が、それを百パーセントの確信に変えたのは、お姉さまが、風邪をお召しになつて、学校を休まれたときです。

「由佳里、奏ちゃん、今日も瑞穂ちゃんのこと頼んだわね」

まりやお姉さまの、鶴の一声。その前日にも同じようにまりやお姉さまには言われていたから、特にとまどいなどありません。食事の準備だけですから、それほど問題はありませんでした（お粥を作る役の由佳里ちゃんは別として）。

そして、これはチャンスと思つたのです。

風邪をひけば、汗が出ます。汗を放っておけば、体が冷えて病気が悪化します。それを防ぐ

ためには、当然、汗を拭く必要があります。

なぜ、昨日それに気が付かなかったのか。奏は、一つの意味で自分の愚かしさを呪ったのですけれど、それ以上の必然が到来したと、光が見えたようでした。

そして、お昼休み。由佳里ちゃんと一緒に、お姉さまのお食事のお世話をします。

「夕べ、由佳里ちゃんに宿題を教えてあげていたのよ」

「ええっ、そうなのですか？ 由佳里ちゃんずるいのですよ」

「あら……奏ちゃんは私の風邪がひどくなつて、明日も寝込んだ方がいいのかしら？」

お姉さまの言葉に、奏は慌てて、

「はややつ、ちつ、違つのですよつ、そういう意味ではないのですよ」

と答えたのですが、あとあと冷静になつて考えてみると、「冗談半分は当然として、何かアイディアを得たひらめきに似た喜びの表情が半分あつたのです。

そして、食事も終わりがけの頃。

「お姉さま、お召し上がりになつたらお体をお拭きするのですよ」

奏は、用意していた科白を、お姉さまにぶつけてみたのです。

「つまり、あのときの私の慌て方を見て、奏ちゃんは間違いなく特定した、というわけね」
「はい、紫苑お姉さまがいらっしゃらなかったら、由佳里ちゃんも同じ事実を知ること」

なっただけなんです」

紫苑お姉さまがいらっしやっただけは、本当に心臓が飛び出るかと思ったのですよ。罪深そうなお姉さまの言葉は、紫苑さんの到来を喜んで僕の裏返しであろう。

「あのあと、紫苑お姉さまに体を拭いていただいていたのですか？」

「ええ、紫苑さんはすでにその事実を知っていたから、まったく問題はなかったわね……胸パッドで遊ばれたのはお約束として」

僕の言葉に、お姉さまの表情が暗くなる。

「僕が……もう少し洞察力と行動力を鍛えていれば、もう少し事実の特定を素早くしていれば、お姉さまの汗を拭くことが出来たんですね……」

……うわ。

「か、お姉さま…… if の話はあまり好ましくないわよ」

「並行世界では、僕は四回もお姉さまとえっちなことをするのですよっ！」
かなシナリオ

お姉さまが、涙を流しながら、叫び声を上げる。

「まりやお姉さまのフラグも、由佳里ちゃんフラグもつぶしたのに！ 生徒会長さんのフラグも立たなかったのに！ 部長さんの言葉に……なんで、なんで『犬』じゃなくて『鍵』だったのですか！」

システム・アナリシス（なんでもあり）ならこいつが怖いっ！！ギャグ小説のピュア・ハー

ト、周防院奏だ!!!

そんなことを考えつつも、僕は泣き叫ぶ奏ちゃんを抱きしめられずにいた。

奏ちゃんの立場で言うならば、僕が奏ちゃんを振っておいて、しかもその事実は一切気が付かないダメ男であることは間違いない。そして、そんな僕に、奏ちゃんを抱きしめるだけの器量はないし、その資格もない。

「母様……少し、奏ちゃんをよろしくお願いします」

僕は、その場の空気が重くて、台所へと逃げ出した。

世界の外側を知られ、そこから僕の一挙手一投足がばれだという恐ろしい事実がそこにあるわけだが、肝心なのはそこじゃない。

やかんを火に掛けると、僕はインスタントコーヒーとココアを取り出す。ピンクの可愛いペアのマグカップを取り出し、片方にはコーヒーを、もう片方にはココアを。そして、ココアの側にだけ、大量のお砂糖を入れる。

「うう……お姉さま……」

「奏ちゃん……」

久々の現世を楽しむわずかな時間を使って奏ちゃんを慰めてくれる母様に、このときは感謝しなればならない。

恋に破れた女性を慰めるのは、それを知る女性であるのが絶対条件である。男である僕には

決して、その気持ちに分からないのだから。

(……そろそろかな)

やかんの湯気を確認し、コーヒーとココアに注ぐ。

ココアはつくりかたにあるとおり慎重にかき混ぜ、粉が確実に溶けるための措置を執る。

コーヒーはブラックだし、僕の飲むものだから放っておいて良い。

そして、ふたつのカップを、テーブルへと運ぶ。

「奏ちゃん、少し落ち着きましょう」

テーブルにココアを置いて、奏ちゃんの様子を見る。

「お姉さま、お優しいんですね」

奏ちゃんはそのココアにゆつくりと口を付けると、ゆつくりと味を確かめる。

「さすがはお姉さま、奏の大好きな味なのですよ」

奏ちゃんの微笑みが、少しだけ僕の心を軽くする。

「母様、ありがとうございます」

母様は、僕の言葉に何も言わずに頷いてくれた。正しいとは言えないだろうけど、最悪の選択ではなかった。母様にそう保証してもらえたようで、心が軽くなった。

「ところで、母様は、お茶を召し上がることが出来るのでしょうか？」

僕は、母様に確認する。そうすると、母様は黙って首を横に振る。やはり、物理的な干渉が

出来ない以上、お茶を飲むことはできないようだ。

そのとき、ふと思い立ったことを、実行してみる。

「母様、父様に伺ったのですが、甘いチョコレートは好きでしたよね」

「ええ、よく覚えているわね」

「人間時代の想像力を働かせて、そのチョコレートを一口ほおばった気分になっていただ
く、というのはいかがでしょう？」

「あら、面白そうね。ぜひお願いしたいわ」

「では……」

僕は、深呼吸をすると食堂に沈黙を作り出す。

そして、一言目を発する。

「明日はクリスマス、あの人に贈るプレゼントは何にしよう。考えながら辺りを見回し、食器棚を開け、冷蔵庫を探してみると、板チョコが一枚見つかった。そのチョコレートは、去年のバレンタインデーで使った手作りチョコレートの余り。あときは、お砂糖が少なく、少し苦い思いをさせちゃったつけ。

今度は、とっても甘いチョコレートを作って、あの人をめろめろにしちゃおう。そうと決めたら、まずはチョコレートを湯煎する。大きいボウルと小さいボウル、大きい方には少量の水を張り、小さい方にはチョコレート。二つのボウルを重ねて、ガスに火をつける。少し

つ、少しずつチョコレートが溶けていく。そうすると、ほら、いつのまにか、チョコレートが全部溶けた。

そこに、この間と同じように、お砂糖をまぶして、ゆつくりと混ぜる。混ぜりきったと思つたら、もう一度、お砂糖をまぶして、ゆつくりと混ぜる。混ぜりきったと思つたら、もう一度、お砂糖をまぶして、ゆつくりと混ぜる。お砂糖の量はこれくらいと書いてあつたけれど、バレンタインデーのときは苦すぎたんだっけ。あの時の味を思い出して、お砂糖の量を三倍にしてみよう。そう考えて、またお砂糖をまぶして、ゆつくりと混ぜる。もう一度、お砂糖をまぶして、ゆつくりと混ぜる。最後にもう一度、お砂糖の一杯溶けたチョコレートに、お砂糖をまぶして、ゆつくりと混ぜる。

あとは、型に入れて冷やすだけ。バレンタインデーで使った、形とりどりの型をもう一度用意する。スプーンで、ボウルから少しチョコレートを掬って、それをゆつくりと型に流し込む。少し足りないみたいだから、もう一度掬って、ゆつくりと付け加える。ハート形、星形、菱形、三角形、丸形、長方形。六種類の型が三個ずつ、チョコレート色で埋まっていく。ハート形の型が、一つだけ余っている。これにも、チョコレートを流してしまおう。

チョコレートを流し込んだら、ゆつくりと、ゆつくりと冷まして、むらができないように静かに固める。見ているだけで何も変わらないのに、心臓がどきどきする。うまくできたかな、失敗しちやっただかな、早く食べてみたい、固まってないからまだ食べられない。

いや、北^{まりやのネタ}*の拳より、範馬^{ぼくのネタ}*牙のほうが男っぽいと思うんだけど。

「私じゃ逆立ちしても勝てそうになくなっちゃったわ」

まりやなら刃^キ*ネタをわかってくれる。そんな風に思っていた時期が、僕にもありました……。

「お姉さまが二人……本当に、お姉さまのお母様なんですか？」

僕とまりやの掛け合いを話半分に流していた由佳里ちゃんが、当然の疑念を母様に向ける。

「ええ、宮小路幸穂です、よろしくお願いしますね」

母様が自然で綺麗な挨拶を決める。その一方で、由佳里ちゃんはがちがちに緊張している。

「お名前は？」

「し、失礼しました、上岡由佳里と言います、こちらこそよろしく願っています」

一子ちゃんるときで慣れていたというのもあるのだろうが、それを差し引いても由佳里ちゃんを一撃で魅了するのは、さすがは第五十代エルダーシスターと言わざるを得まい。

「本当に、瑞穂お姉さまそっくりなんです、幸穂お姉さまは」

この完全無欠のお嬢さまは、僕そっくり程度の評価しかもらえないらしい。

由佳里ちゃんの言葉に、まりやのプロパガンダで恵泉女学院という水面を埋め尽くし、そして手の着けようもないほどの密度で池の中すら根で埋め尽くした、おこれる浮き草のような宮小路瑞穂像を、僕は久々に突きつけられたような気がした。

十条の系譜

結局、四人＋幽霊一体で、食堂でお茶をすることになった。幸いにも、僕が湧かしたやかんのお湯は冷めてはいなかったのだ。まりやと由佳里ちゃんにはすぐ紅茶を出すことが出来た。

「……いまいち」

「悪かったね、練習なんかしたことないよ」

「そっか、瑞穂ちゃんって、今年になってから転校してきたんだよね」

まりや、僕の置かれている状況を、すっかり忘れていないかい？ さすがに、三年間お嬢さま学校で過ごせという遺言を果たせるほど、僕は根性のある人間じゃないと思う。

なお、まりやも由佳里ちゃんも口の中が甘いということ、混ぜものはしないでおいである。誘導しておいて何だけど、人間の想像力ってすごいなあ。

「ところで、みんなにちよっとお伺いしたいのだけれど、よろしいかしら？」

母様の言葉に、全員が一斉に反応する。

「十条紫苑さん、ってどんな方なのかしら？」

「か、母様？」

「だつて気になるでしょう、瑞穂のパートナーに一番ふさわしい子だ、なんて奏ちゃんに聞かされたら」

うまい。この言い方なら、由佳里ちゃんに感づかれなくて済む。

「そうですね……大和撫子、という一般的なイメージを想像していただければ、かなり近いと思います」

由佳里ちゃんが、少し積極的に説明する。

「ただ、大和撫子と致命的に違う点は、前年度エルダーとしてふさわしいカリスマと迫力があるということです。瑞穂お姉さまと同じように、女性にしては大柄ゆえ、包み込むような優しさを感じられるという意見も多くあります」

由佳里ちゃんの答えに、母様は微笑んで、

「そんなにすばらしい方のパートナーにふさわしいなんて、瑞穂は恵まれているわね」と答えを返すが、不満は消えないらしい。

「ちよつと、学院祭の時のスナップ写真持ってくるわ」

「ありがと、まりや」

まりやも同じことを考えていたようで、あわてて食堂を後にする。少し急いで階段を上る音のリズムが一定で心地良い。

「ところで、瑞穂お姉さま……チョコレートの作り方なんて、どこで覚えられたのですか？」
たしか、家の言いつけで台所に入っただけなわけではなかったのでは。由佳里ちゃんの指摘は全く正しく、僕は慎重な回答を求められる。

「チョコレートなんて、湯煎して適当に何か混ぜて型に入ればそれで終わり」と聞いたか

ら、ちよつとそれで話を作ってみただけよ」

こつうときは、本音が一番楽で確実だ。実際、どの年でもバレンタインデーが近くなれば、そんな話なんてごろごろ聞こえてくるし、ちよつと漫画や小説を読んでもれば、手作りチョコの話にはあふれている。

それにしてはリアルでしたね、なんていう由佳里ちゃんのコメントは、人間の想像力の勝利という結論を僕の中にもたらす。

「人間の想像力だけを使って、瑞穂は見事に、私にチョコレートをプレゼントしてくれたのよ。ちよつど、私が瑞穂と同じくらいのときに作ったレシピそのままだね」

なんたる偶然。それとも、親子は思考回路が似るだけなのか。

「お待たせ、持ってきたよ」

まりやが、スナップ写真が入ったミニアルバムを2、3部抱えて持ってきた。

「どうぞ、幸穂さまご覧下さい」

まりやがアルバムの一つを母様に手渡す。

しかし、なにもおこらなかつた。

「まりや、一子ちゃんと同じなんだよ」

「あ、そつか……失礼いたしました、一ページずつゆっくりめくっていきますね」

まりやが、アルバムのページをまずひとつ繰る。

「これは、この間の学院祭で、そちらの奏ちゃんの舞台写真です」

「この男役の方は？」

「演劇部の部長で小鳥遊圭さんです、一子ちゃんとは面識はないですけど、一子ちゃんがらみでは影でかなりお世話になっています」

「格好良い子ね、十条紫苑さんもこんな子なのかしら？」

「まあ、それはお楽しみということで……」

母様の合図で、まりやが次のページを繰る。

「あら、ロミオとジュリエットね……ジュリエット役のこの子は？」

緊張する様子が可愛いわね、そんなコメントが母様の口から出る。

「敵島貴子さんです、現在の生徒会長ですね」

「あら、可愛いから瑞穂のパートナーにはちょうどいいと思ったのだけれど」

「幸穂さま、それは貴子を買いかぶりすぎです」

敵島家が新しい家であること、そして貴子さんが堅物のマニュアル人間であることなどを、まりやは母様に強調して話す。強調というより、だいぶ誇張が入ってるような気がするけれど、どうせ母様は貴子さんとお会いにならないだろうから、僕は話を軽く流しておくことにした。

「この舞台袖の眼鏡ちゃんも可愛いわね、どんな子なのかしら？」

「菅原君枝さまです、真面目なのにとことなく色気があって、とても素敵な方です」

これは、由佳里ちゃんがフオロ！。

そして、まりやが次のページを見せた瞬間。

「……」

母様が、固まった。

零。一。二。三。四。五。六。七。八。九。十。

「え、えーっ?!」

母様が、お嬢さまとは程遠い叫び声を上げる。

「どうしたんです？ 幸穂さま」

まりやの言葉で我に返ったのか、母様はお嬢さまらしさを取り戻して、ゆつくりと次の言葉を告げる。

「ごめんなさい、まさか慶行さんそっくりの子がいるとは思わなかったから、少し取り乱してしまっただわ」

楠木慶行。細い眉と長い髭が特徴の、僕の父親である。

一応日本最大のグループである楠木グループの総帥をやっていて、それにふさわしい人間であれと日々努力をしていることは、僕の密かな自慢でもある。

で、それが誰に似ているというのであろう。

そのページの写真にいるのは、前述の他には、マキユーシオである紫苑さん、メイド長役の可奈子さん、執事役の葉子さん、城主役の美智子さん、城主夫人役の夏樹さん。

この劇は、大道具・小道具も含めて三年A組は全面協力していたので、表を見ても裏を見ても、A組の誰かしらが関わっていた。こうして写真を見ると、その事実が改めて伝わってきて嬉しい。

話を戻して、紫苑さん・可奈子さん・葉子さん・美智子さん・夏樹さんの誰が父様に似ているのが問題だ。正直言って、僕には皆目見当がつかない、楠木慶行の息子であるにもかかわらず、雰囲気似てる人というと、葉子さんや美智子さんなんかそれに当たるんだろうけ

ど、見間違えるなんてありえない。

「……」

どうやら、横でまりやが同じことを考えていたらしい。

「幸穂さま、申し訳ありませんがヒントをいただけますか」

父様の顔を知っている、僕とまりやはギブアップ。そして、そもそも奏ちゃんと由佳里ちゃんは問題の前提である父様の顔を知らない。

「問題を出したわけじゃないのだけれど……えっと、このマキューシオ様よ」

母様が、言葉と共に指さしたのは、紫苑さんだった。

紫苑さんと父様が、似ている？ まさか。

「とすると、私というものがあひながら、慶行さんが浮気をしていた可能性が……」

母様の顔が少し青ざめる。幽霊なのに青ざめるのがはつきり分かる、というのは面白いかも。

「紫苑さまと……なるほど、言われてみれば似てるかもしれない」

まりやが、何か納得したらしい。そして、その言葉尻に何か引っかかったのか、母様からも質問が出る。

「紫苑さまって、この慶行さんもどきが、十条紫苑さんなの？」

もどき言っな、このおぼはん。

僕は母様をにらみつけながら、その言葉を肯定する。

「十条家だと……ゆかりんがお義父さまのいとこだったわよね……よかった、慶行さんの子じゃないのね」

ゆかりん、これは由佳里ちゃんのことじゃない。お祖父様の、年の離れた従妹に、十条紫という人がいる。

けど、母様がそれで納得したとしても、僕が納得できるわけがない。そいつは、紫苑さんに余りにも失礼だ。

あれ、ということ。あんまり考えないけど、女系で考えると僕と紫苑さんはどこ？
(どうしたのです、はこの子よ)

そつだ、はとこなのは父様と紫苑さんだった。

紫苑さんが肌の白いダークエルフの印象と重なるが、気にしないことにして本題に戻る。
紫苑さんと父様はそんなに似ているのか。

……ダメだ、イメージできない。

「そんな瑞穂ちゃんのために、こんなものを用意してみました」
じゃじゃーん。

サランラップと油性マジック

まりやは紫苑さんの写真に一礼すると、サランラップを紫苑さんの部分に、二重に貼り付ける。

きれいに貼り付け終わったら、紫苑さんの顔に髭を書き始める。

口ひげとあごひげを書き終えたら、眉毛を書き足す。

「どう？ これでイメージつかめた？」

これでやせければ確かに似ている、まりやはそう補足して満足する。

確かに、ここまでされてみると、なんとなくなだが、似ていることが分かる。

そして、マジックでの落書きの手順の逆が、化粧のプロセスを追っていることにも気が付く。

「私では、これは気づかないわね」

僕は、まりやの洞察力に白旗を揚げる。

けれど、母様が驚くほど似ているというのも、また違う気がする。

「これ以上は、慶行おじさまのほうを変えてみたほうが早いと思うわ」

まりやが、楽しそうに宣言する。しかし、父様の場合は社会的地位もある。そう簡単にイメージチェンジなど許されるものではないことは、まりやとて重々承知のことだろう。

「そうね、昔話をちよつとしましょうか……それで、瑞穂も納得してもらえるかもしれないもの」

鈍感な僕に最後の証拠を突きつけようと、母様の話が始まった。

それは、二十二年とわずかに昔の、幼い愛の物語。

「これがお祖父様の遺言なのですから、仕方がないでしょう?」

私は、その少年の目をじっくり見ながら、説得を繰り返す。けれど、彼には納得する様子がない。

ならば。

私は、彼を挑発してみることにした。

「高々、取り返しの効く一年間です、それをご承知なされないことは遺言に対する侮辱です。私の婚約者に、そんな不義理な人を迎えたつもりはありませんわ」

「ど、どっちが不義理なんですかっ!」

それに、リスクが大きすぎます、無理・無茶・無謀の三拍子揃ってます!」

「リスクに関しては、あなた次第で十分小さくできるのですけれど」

そついいながら、私は彼 婚約者・嫡木慶行さんの顔をなでる。

「この可愛い顔、高い声、美しいスタイル」

頬から顎へ、そして首筋へ。私は、その手を少しずつ動かす。

「ちよつとしたコツでいいんです、それだけであなたは美しくなれるのですから」

「それは分かっています そいつで、さんざんいじめられてきましたからね。しかし生活するとなれば話は別です」

なおも食い下がる彼に、私は知恵を与える。

「慶行さん、簡単なコツがあるのです。カリスマになってしまえばいいのですよ」
カリスマ。

普通の社会では、非常に難しいその立場であるが、簡単にそれを手に入れる方法が、恵泉女学院には複数ある。

その最たるものが、エルダーシスター制度。

単純な人気投票の結果だけで、その人物は神にも等しい扱いを受けるこのシステムが、今回は慶行さんに味方する。

触れるなどおそれ多い。そう思わせてしまえば、慶行さんに手を出す輩などいなくなる。

「エルダーになったら、息苦しくてちよっときついわよ」

夜羽お姉さまの奔放な性格が思い出される。バレーボール部のエースとしての人気から、こう言うのは何だが、多くの生徒をつまみ食いしてきた夜羽お姉さまは、全ての生徒に慕われるべきエルダーをこのように評した。

私だって、エルダーになんかなりたくない。けれど、他にまともな候補のいない状態では、組織的投票がない限り、私に決まってしまうような雰囲気は読めている。

そこで、慶行さんである。

慶行さんの美貌と、クールビューティとしてのカリスマで、票を二分する。その後、慶行さんに票を譲り渡してしまえば、晴れて私は自由の身。一子やクラスメイト達と、責任のないと

ころでゆっくりしていればいだけとなる。

逆に、エルダーとして君臨した慶行さんは、そのカリスマに対する畏敬の念で、誰からも近寄られなくなる。さらに、男性としての頭の良さ、判断力の鋭さと運動能力の高さは、完璧を演出するのに格好的となる。

さらに、エルダーに失敗しても、小さなカリスマを持つことはそれほど難しくない。たとえば、文化部なんかで一度祭り上げられてしまえばこちらのもの。「君」の称号が一度流れれば、洗脳は完成である。

「幸穂さん、そんなにうまくいくのでしょうか？」

「大丈夫です、あなたなら」

私は、慶行さんの額へ、軽くキスをする。信頼と愛情の証に、慶行さんは顔を真っ赤にするけれど、やはり納得は行かないようだ。

「百聞は一見に如かず、と申します」

私の言葉に、赤かった慶行さんの顔が、一気に青くなる。

「せめて、かりそめの拒否権くらいただけなかつたのですか……」

足の力が抜けて崩れ落ちるが、うなだれながらも両手について、何とか上半身だけは支えるその体勢が、見ていて多少愉快だった。

「その、慶行さんという方は、瑞穂お姉さまと同じ境遇だったんですね」
由佳里ちゃんが、ここまでの経緯をまとめる。

……って。

なんで由佳里ちゃんまで知ってるのっ！

「ん？ あたしが言った」

まりや、何てことを！。

「いいんじゃない、体に訴えて黙らせたし」

「ま、まりやお姉さま、そ、そんな恥ずかしいこと言わないでくださいっ！」

由佳里ちゃんが、顔を真っ赤にしてまりやに反論する。

「けれど、ちよっとおかしいですよ」

奏ちゃんがその場をさらりと流す。うまい。

「歴代のエルダーは記念写真が残っています。幸穂お姉さまのお写真は拝見したのですけれど、紫苑お姉さまそっくりの方のお写真は目に出来なかったのです」

奏ちゃんの、演劇部員ならではの、鋭い指摘が飛ぶ。

そつえば、父様と母様は、同じ年齢だったはず。

すると、なぜ母様はエルダーの回避を失敗したのだろう？

母様をあそこまで崇拜する父様では、なすすべもなかったはずではないだろうか。

「慶行さんの人気を語るだけで終わろうと思ったのだけれど、そうも行かないようね」
そして、母様の話は再び始まる。

数日後、私は鐫木の邸宅にお邪魔していた。

「本当にやるんですか？」

「ええ、手続きも終えてしまいましたし、もう引き返せませんもの」

慶行さんの言葉に即答する。こういうのは、あきらめさせるのが肝心である。

「……はい、ではお願いします」

慶行さんの少し情けない表情が可愛くて、私はちよつと意地悪を試みる。

「ふふつ、いつもより可愛いかも知れませんか」

「全然嬉しくないです」

慶行さんがふてくされる。しかし、本当に可愛くなるのはこれからだ。

私は、慶行さんの髪を縛っている、上下2カ所のゴムを取り外す。すると、腰まで伸びた美しい翠の黒髪が、本来のカーテンのようなふくらみを取り戻す。

「ふふつ、やはりこうでなくてはいいけません」

「けれど、これでごまかせるほど女性は甘くないでしょう？」

「ええ、これからが本番です」

眉毛を水で濡らし、剃刀を使って整える。

軽く、細く。

りりしさを出すために、できるだけ直線に沿うように。

眉毛が終わったら、次は髭の処理。幸い、慶行さんの髭はかなり薄く、産毛も同然だったの
で、軽く剃刀を当てるだけで良かった。

コンシールによる化粧をしなくてもいい、というのは、実は慶行さんにとってかなり助かる
ことだ。化粧などしていません、と装うことが出来るから、化粧などについて必要な知識が一
気に少なくなる。

顔の処理が終わったら、次は服の着替え。

胸パッドを縫い込んだブラを手渡す。すると、慶行さんは嫌そうな表情でそのブラを身につ
ける。

それにしても手慣れている。何度も遊んだ じゃなくて練習させた甲斐があった。

「ほら、そんな顔してはいけませんよ」

「今だけです、見逃していただけませんか」

覚悟は出来ているようだったので、私は軽く微笑む。

そして、私は生理用のナプキンと、ショーツを手渡す。

「まさか、ここまで？」

「ええ、もちろん」

「分かりました、少し外していただいて良いです？」

顔を少し赤らめながらの言葉。そんな表情をされると、ついじじめたくなってしまう。

「あら、初めてというわけではありませんし、手伝いますわよ」

「いいえ、お願いですから外してくださいっ！」

顔を真っ赤にして恥ずかしがるその様子に満足して、私は部屋を出る。

そして、待つこと5分。

「どうぞ」

その言葉を聞いた私が部屋に入ると、ブラとショーツだけを身につけた、肌の白い可愛い子がいる。

「その形容はもういいので、可か不可か言っていただけます？」

その言葉に従い、私はブラの形とショーツのふくらみをチェックする。済ましているも頬を赤く染めている慶行さんが可愛いのは秘密だ。

「大丈夫です、では次に行きましょう」

私は慶行さんの処置に太鼓判を押す。慶行さんの作業は完璧。これではれるほうがおかしい。

「あとは制服ですよ……ワンピースなら簡単ですね」

慶行さんは、下着ひとつの状態から、セーラーカラーの縫いつけてあるブラウスをつけ、そ

これからジャンパースカートを穿く。

袖に腕を通してから、背中のファスナーを引き上げる。

リボンを蝶の形に縛り、エムブレムをつけて結び目を隠す。これで着替えは終わり。

慶行さんひとりで作業は一通り出来たみたいだけれど、着慣れないのか、どうしてもリボンがかっこうわるい。

私は、慶行さんの胸元に近づくと、エムブレムをいったん外して、リボンを縛り直す。

「リボンが曲がっていてよ」

軽く直したただけなのに、慶行さんの顔が真っ赤になっている。それを見て、夜羽お姉さまにリボンをなおしていただいたときに、どきどきしたことを思い出す。

「あ、ありがとうございます」

「ええ、これで着替えは完璧ですわ」

うん、下手な女の子よりよっぽど可愛い。

私はそう確信して、慶行さんを連れ出す。可愛い転入生を、私が迎えるのだから。

「そ、そんな無茶をして、その慶行さんという方は大丈夫だったんですか？」

奏ちゃんが、女子校にいやいや引きずり込まれる父様のことを心配する。だが、心配のしすぎではないか。

「なあに、かえって免疫力が付きます」

僕の反論に、奏ちゃんは僕の顔をじつくりと見る。そして、母様に向き直り、奏ちゃんはつぶやく。

「……見た目は紫苑お姉さま、中身はお姉さまということでもいいんですか？」

奏ちゃんが確認すると、まりやはそれに頷く。

それなら大丈夫かもしれません、奏ちゃんはそうつぶやいて、手元の甘いココアに口をつける。

「それなら、何も考えずに安心してみていればいいのですよ」

まさか。そう思つて二度三度と想定してみた。うーん、やっぱり安心できない。というのが普通の人だと思つのだがどうか。

「過去のことだから、そんなに考えなくても良いのだけれど」

母様の常識的な言葉に、僕は次の言葉を待つ。事実だけは正確にお願いしたい、と思ひながら。

そして、学院長室の前にたどり着く。

「取りあえず、基本的な振る舞いは幸穂さんと同じようにすればいいんですよね」
慶行さんの言葉に頷いた後、私は慶行さんと別れ、教室へと戻った。

「幸穂さん、嬉しそうね、どうしたの？」

「ええ、幼なじみが転校してくるの」

「それは楽しみね、人数も少ないし、A組に来てくれるかしら？」

クラスメイト達とする何気ない会話が、今日はいつものに比べて、少しだけ楽しい。

それにしても、慶行さんは気が付いていただろうか。私たち二人を見る視線のどれ一つとして、慶行さんが女性であることに疑いを持たなかったことを。

そして、朝のショートホームルームの時間。

「今日から、転校生がみなさんのクラスで一緒に勉強することになりました」

御門由子さんです、先生がそう言くと、長い黒髪の転校生が教室の扉の向こうに現れる。

彼が教室に入ってから壇上に上がるまで、溜め息以外の何も聞こえない時間が続く。そう、クラスの全員の注目を、今慶行さんは浴びているのだ。

「御門由子と申します、卒業までの短い間ですがよろしく願いいたします」

一礼。

そして、顔を上げて、につこりと微笑む。

教室が、にわかにざわめきはじめた。

なんて美しい方なんでしょう、幸穂さんの幼なじみらしいですわ、立ち居振る舞いもすばらしいです、……。

完璧な結果に、私は胸をなで下ろす。私が、子供の頃から彼を大和撫子として育ててきたのだから当然といえば当然だけれど、世の中に安心などないのだから。

「御門さんの席はどこにしましょう……そうね、窓側に一つ作っていただけませんか？」
はい、と学級長の声がする。余分な机を準備してないので、あとで取ってこなければなら
ない。

「では以上です、授業までに準備は終わらせておいてください」
先生が立ち去ると、生徒達が一斉に『御門由子さん』に群がる。

前の学校はどちらですか、どんな学校だったのですか、編入試験の成績が満点だったという
のは本当ですか、……。

まるでアイドルの『追っかけ』を見ているようで、私は多少引いたものの、ぽつんと人余り
を探していた学級長に声をかける。

「机を取りに参りましょう」

ブレーキのない質問責めにとまどう慶行さんの様子を想像しながら、少し汚れた机と椅子を
一組用意するために、私と学級長は倉庫へと向かった。

「どこの宮小路瑞穂ですか、それは」

僕は、頭が痛くなるのを耐えながら、母様に問いたです。

「あら、瑞穂もこんな感じだったの？」

「由子さまほどではないですけどね」

「まあ、父親をそう言うものではありませんよ」

その威厳ある父親を、よりによつて女装させて遊んでいたのはどこのどいつだ。その言葉を懸命に押さえ込みながら、僕は次の言葉を紡ぐ。

「その後の展開はなんとなく予想がつきますが……けれど、エルダーは母様だった。新しい候補にそれだけの票が移るなんてあるんでしょうか？」

「ええ、実際に、二十パーセントの票が由子さんに流れたの」

残りの票は多くとも八十パーセント。その場で母様に決まるはずがない。御門まりや・十条紫苑という、核のスイッチクラスに強力なプロパガンダによつて当選した僕でさえ、九十パーセントの得票は得ていないのだ。

「恵泉のルールは、たしか票の譲り合い……まりや、細かいルールは分かる？」

「ううん、毎年テキストに決めてるはずよ」

「ということは、その票の譲り合いのルールが問題に？」

「さすがね、瑞穂」

母様の話の、次の場面が始まる。

エルダー選挙の投票と集計が終わったその日。

私と由子さん（慶行さん）を含む五名が生徒会室に呼び出された。どうやら、生徒会長と合
わせた六名に票が入っていて、決定はしていないらしい。

なぜか投票率が百パーセントあるいはそれに近くなるこの選挙において、票数が六名に集中
するというのは珍しい。浮動票の吸い取りに由子さんの存在が効いていたことが伺える。

それだけ、由子さんはすごかった。

慶行さんだった（笑）頃に培った知識と運動神経で他を圧倒し、羨望のまなざしを一手に担
うその姿は、私の想像以上に格好良く、浮動票のすべてを得ていたとしても私は納得せざるを
得ない。

「ここにお集まりいただいたのは他でもありません、エルダー選挙について、私を含む六名
の候補者に、票の調整をお願いしたく集まっていたいただきました」

生徒会長の言葉に、全員が一様に頷く。

「話し合いをしていただく前に、開票結果をお渡しします」

「少々お待ちいただけますか」

生徒会長の言葉に、由子さんが待ったをかける。

「このままだと、『票の譲り合い』による矛盾が発生してしまう可能性があります」

その言葉の意味を、聞いた瞬間に理解できる人は、その場にだれ一人としていなかった。

「なるほど、父様も考えましたね」

話を聞いているところで、納得したのは僕一人らしい。

「どういうこと？」

まりやの問いに、僕は答える。

「例えば、この間の選挙で、私が七十四パーセントしか得票できなかったと仮定します」

そして、貴子さんが二十六パーセントの得票を得たとする。

このとき、貴子さんから僕へ票が譲られれば、問題なく僕がエルダーになる。

逆に、僕が貴子さんに票を譲っても、まりやに異論はあろうが貴子さんがエルダーになると問題は無い。

では、この二つが同時に発生した場合はどうなるか。

何も考えないで票を処理すると、単純に得票が入れ替わるだけになる。これでは票を譲った意味がない。

そこで、普通は話し合いをしてどのような票の譲り合いにするかを考える。

しかし、お互いに譲らない場合は、ローマ法王選挙と同じような根比べが発生する。その場合、得票の問題はすでに消え去り、二人の間の人間力の差によって、責任を押しつけられた側がエルダーになる。

たとえば、二十六パーセントを獲得したのが貴子さんじゃなくてまりや、あるいは紫苑さん

だった場合、僕がどれだけエルダーを拒否しようと、間違いなくエルダーを押しつけられるわけだ。

「瑞穂ちゃん、よくそこまで頭がまわるね」

「だって、ずっと考えてたから」

いかに強力なプロパガンダを備えていようと、得票が七十五パーセントを超える可能性は非常に低い。この場合、僕はエルダーの第二候補である貴子さんに全身全霊をもつてエルダーの役割を押しつけるつもりでいた。

この例とは違って、貴子さんはエルダーをやりたそうだったし。

「瑞穂ちゃん、逃げることばかり考えてたんだ」

「君子危うきに近寄らず、という言葉で反論に換えさせていただきますね」

今になって思い返せば良い思い出は多いとはいえ、男であるという秘密を抱えて全校に注目されるのはあまりに危険と言えた。

僕は、何事もなく過ごしたかったんだ。

「今もそう思ってる？」

「当然です、ですからみなさんに信頼されるエルダーという立場を成し遂げられるのです」
今、僕が一番目立たない方法は、典型的なエルダーとして、生徒全員の手下となって動くこと。幸いにして、理想の女性である紫苑さんが僕のそばにいて、エルダーの手下になってくれ

ている。

紫苑さんにするべき感謝は尽きない。

「……と、中断させてしまいました、続けていただけますか」

母様は頷くと、エルダー選挙の最後の答えを口にするべく、次の状況を語りだした。

「票の譲り合い？」

その場にいた誰もが、耳を疑う。それも当然、由子さんの頭の中にあるのは、ただ一つのケースなのだから。

「ええ、任意の二人がお互いに票を譲り合つと、永遠にエルダー決まらず、話し合いも終わらない現象が発生し得ます」

やっぱり。

私と由子さん、どちらがエルダーになるのか。より正確には、私と由子さんのどちらがエルダーを押しつけられるのか。

そして、由子さんの説明は続く。

「この現象を解消する方法は、お互いの話し合いにのみありますが、その場合二人の力関係のみによってエルダーが決まるため、『全校生徒の意思によって決める』選挙の意義が失われてしまいます」

由子さんの言葉に、全員が聞き入る。

二人の力関係。さすがは慶行さん、よく分かっていらつしやること。

「それを防ぐためには、一定のルールを定めなければいけません。そして、そのルールを定めるためには得票率を知ってはいけないのです」

由子さんの話が、ここで一旦止まる。

そして、全員が由子さんの言葉待つ。

「というわけで、まずは票の譲渡に関するルールを定めたいと思うのですがよろしいでしょうか？」

「分かりました、由子さんになにか素案はあるのでしょうか？」

「はい、黒板をお借りしてよろしいでしょうか？」

生徒会長が頷くと、由子さんは黒板に、候補者六名の名前を書きだした。

そして、由子さんの次の言葉に従い、候補者六名それぞれに紙と鉛筆が配られる。

「今お配りした用紙に、お名前と、票を譲渡する相手をお書き下さい。ただし、票の譲渡をしないのであれば、『譲渡先無し』などのコメントをお願いします。なお、この用紙は誰にも見られないようにお願いいたします」

そう言われても、困ってしまう。

「では、黒板の裏に一人ずつまわっていただいてから、用紙へお書き下さい。書き終えたら

中身が見えないように折り畳みましょう」

生徒会長の具体的な指示に従い、全員が用紙に書き物をする。もちろん、私が書いた内容は、由子さんの予想通り「御門由子さんに譲渡」だ。由子さんも、「譲渡先・宮小路幸穂」などと書いているだろう。

私は、この次の、由子さんが確実に「勝つ」ために、どのようなルールを持ち出すのかに、すごく興味があった。

「では、次にルールなんですけど、得票数の少ない順番に、今紙に書いていただいた内容を実行していただきます。ただし、得票数は譲渡が行われた合算のものを利用し、元の得票数は考慮しないものとします。実行中に、どなたかが得票率七十五パーセントを超えた時点でエルダーは決定、その後の処理は行わないものとします」

というルールなのですがいかがでしょう、由子さんは言う。

「その場合、票を譲渡した推薦候補者はどのような扱いになるのでしょうか？」

「譲渡した時点で、それ以降の対象にはならないと考えています」

生徒会長の質問に対し、由子さんが解答する。

……なるほど、これが由子さんの「勝つ」ルールか。この方法であれば、私より由子さんの得票が少ないことが前提で、私がエルダーになる。由子さんはこれを狙ったのだろう。

しかし、それでは私が困る。

「反対いたします、対象にはなりつづけるほうが全員の意見が反映されるのではないでしょうが、またその意味で得票率によってエルダーが決定した後も処理を続けるべきと考えます」

「それも一理ありますね、由子さんはいかがかしら？」

「ええ、その通りだと思います」

これで、由子さんの思惑は封じた。

「あと問題になるのが、実行順番に関して、得票数の『少ない』順番にするか、『多い』順番にするかですね」

元のままでも悪くないのであれば得票率の少ない順番

期待の大きい順に処理するべきなら得票率の多い順番

由子さんはそう説明する……まるで、得票率の多いほうを選択しようと誘うように。

けれど、由子さんの期待する反応とは、場の空気が違った。

「由子さんが最初にお決めになったのですから、得票率の少ない順番のままでよろしいと思いますわ」

「私もそう考えます」

候補者のふたりが、案の変更をしないことを支持する。

「幸穂さんは？」

生徒会長の言葉に、私は、

「ええ、みなさまと同じでよろしいと思いますわ」

として、問題なく由子さんの提案を却下する。

そして、開票結果が報告される。

御門由子・百五十一票

門倉菜・八十六票

上岡菜月・九十二票

菅原鏡子・五十二票

美倉契・百六票

宮小路幸穂・二百六十二票

合計・七百四十九票 投票率百パーセント

「では鏡子さん、用紙を」

鏡子さんの票の譲渡先は、私。五十二票を得た私は、三百十四票に書き変わる。

次に、菜さんの八十六票は由子さんへ。由子さんの票が二百三十七票へ。

上岡菜月さんの九十二票は生徒会長へ。会長の票は百六票から百九十八票へ。

「ここまででは順当ですわね」

「ええ、エルダーにふさわしい方はどうみても三名のどなたかですもの」

「次の票はどうなるのかしら？」

票を譲った三名から、安堵の声が漏れる。

そして、次。

「では私ですわね……」ご覧の通り、由子さんに票を譲渡致します」
あれ。

私はその様子に、若干の違和感を覚える。

確か、会長はエルダーを希望していたような……？

「なにか、不思議だという顔をしていらっしやいますね」

私に向かつて、会長が言う。

「私が誰かに票を譲渡したのが意外だったのですが、このように平等な提案をしていた方がエルダーにふさわしいと考えるのは自然ではなくて？」

そう言いながら、会長はちらりと由子さんを見る。その頬が少しだけ赤いのが、癪に障る。

「次は由子さんかしら？」

「いいえ、幸穂さんですわ」

私には、会長の票が移ったことを考慮できていなかった。

とすると、このまま全部の処理が終わったら私がエルダーになってしまう。
何とか止めないと。

「ご覧の通り、私は由子さんに票を譲渡致します」

この処理で、すべての票が由子さんに集まる。

「これで、由子さんにすべての票が移りましたのね」

うれしいことですね、そう私はつぶやく。

「由子さん、おめでとうございます」

会長が同調する。

しかし。

「いいえ、みなさま。ルールというものは、厳密に適用してこそ価値のあるものなのです」
由子さんは言い切った。

「票が決定した後も処理を続けるべき、と提案されたのは幸穂さんでしたよね」

そのとおり。だからこそ、私は雰囲気を利用して処理をストップしようと考えたのだ。

「由子さん、どういうことですか？」

「たとえこの場にいない、ゼロ票の方だとしても。私がこの用紙に書いた人物がエルダーである、という意味です」

由子さんが、会長に用紙を渡す。

会長は、それをゆつくりと開く。

そこに描かれていた文字は。

譲渡先・宮小路幸穂

私が予想していた文面と、記号一文字の差違もなかった。

「おめでとうございます、幸穂さん」

由子さんが、につこりと微笑む。

その微笑みが、私には悪魔の嘲笑に見えた。

「因果応報とはよく言ったものです」

僕は、素直に感想を漏らす。

「ひどーい！ 瑞穂をそんな子に育てた覚えはありませんっ！」

「お姉さま、さすがにそれはひどいですっ！」

「瑞穂ちゃん、その言い方はないんじゃない？」

「なんか、三人から責められるのもどうかと思う。」

「由子さま、クールでスマートで、とっても格好良いのですよ、うちのクラスの由子ちゃんとは大違いなのです」

けれど、奏ちゃんはひとりだけそのドラマに浸っていた。

「それにしても、瑞穂ちゃんがエルダーに当選して、貴子が出しゃばってきたときの紫苑さまを見ればその格好良さも簡単に想像つくわね……その場面、ぜひ紫苑さまに再現していただ

きたいものです」

無茶言うな、まりや。

「マキユーシオの魅力全開なのですよ」

奏ちゃんもそれに同調する。ちょうど今見ている、紫苑さんの写真がマキユーシオというものもあるだろう。

「ところで、もう一度確認するけれど、このマキユーシオ様が例の十条紫苑さんでいいのよね？」

母様の目が真剣だ。

僕は素直に頷くと、母様はじつくりと写真を見直して。

「とりあえず、見た目は合格ね」

と、嬉しそうな顔で宣言する。

……けれど、本当に僕は紫苑さんとそういう関係になりたいのだろうか？

「母様は、御門夜羽さまと御門由子さま、どうご覧になりました？」

僕は、母様の無言の質問に、カウンターをぶつけてみる。

「あら、そんな質問されちゃうと、お母さんときどきだわ」

……なるほど。

どうやら、僕の気持ちはそういうことになっているらしい。

紫苑さんを、少なくとも恋人候補として意識しているというのが僕の本心であるなら、ただ単純に慎重であるだけの学院生活は、非常にもつたいない。

次に紫苑さんと二人きりになれば、僕の気持ちと紫苑さんの気持ちを、確認したいと思った。

エピローグ・少年の現実

夜が更けていく。

まりやや由佳里ちゃん、奏ちゃんと母様は非常に楽しそうに会話している。

けれど、僕の心はどこか晴れず、僕はじつと窓の外を見ていることしかできない。

降り積もる雪は、地面を少しずつ白く染めていく。

「牡丹雪、ねえ……」

心まで白く染めてくれるなら、何も考えなくて良いのかも知れない。

けれど。

僕の心に潜む黒い欲望を、奏ちゃんや母様に見事に抽出されてしまった今では、紫苑さんに顔を向けることすらできない。

「瑞穂？」

母様が、僕のそばに寄ってくる。

「あなたが感じている感情は、精神的疾患の一種でもなんでもないので。しずめる方法はあなた自身が知っているわ、あなた自身の心に任せなさい」

僕の……心。

紫苑さんの顔を見たい。

紫苑さんの声を聞きたい。

紫苑さんの振る舞いをまねたい。

紫苑さんに抱きしめられたい。

紫苑さんに困ったことがあれば助けたい。

紫苑さんと

ずっと一緒にいたい。

これが僕の心の答えだとするならば、とても単純で浅ましくて頭の悪い目標だろうとは思
う。けれど、嘘偽りはひとつとして存在せず、それは確かに僕の求めているものであること
は、はつきりと分かる。

けれど、この単純なことさえ、四月以降を考えてしまうと、とても難しいことがすぐにわ
かってしまう。ならば、動かなきゃ。

こんな明白なことに今初めて気が付いたなんて、本当に、僕はホームラン級のバカだな。

「やつと見えたみたいね」

母様の微笑みは、少しだけ実体が薄くなって見える。

……実体が、薄い？

「あら、気が付かれちゃったわね……そう、私もそろそろ成仏　じゃなくて、昇天する時
間が来たみたい」

母様、こんな別れの時になって、一子ちゃんと同じボケがまさなくていいですから。

「母様……ありがとうございました」

母様は、十五年目にして、やっとこの世にお別れを告げることが出来た。僕の紫苑さんへの
思いは、母様を安心させる鎮魂歌になることができたのだろうか。

「それじゃ、頑張つてね……瑞穂、私の娘」

今度こそ、母様の姿が完全に消える。

最後まで『娘』の表現は消えなかったけど、まりやと紫苑さんを足して二を掛けたような性
格の母様のことだ、ただ単に僕をからかっているのだろう。

「母様……」

僕は、母様がそこにいたはずの空間を、ぼんやりと見ていることしかできない。

もう、母様にお会いすることは、決してあり得ないのだ。

「おばさま、生涯百合宣言の成就、おめでとうございます」

涙ながらに、まりやがつぶやく。

それにしても、生涯百合宣言って何だ？

「女の子としか付き合わないという宣言よ、それも美少女としか」

まりやが、宣言を説明する。

「夫が美少女だったのだから、あとの心残りは息子でしょう？」
はあ。

「それで、息子がこんなかわいい女の子になっていて、しかも恋の悩みを抱えているのだから、それこそ幸穂おばさま発の女の子ワールドの締めにあつたでしょう」

そんなことを、考えていたのか。

結局、僕は女の子としてしか見られていないということなのか、そうなのか。

これが、吉と出たのか凶と出たのか。

娘、という言葉が冗談でも何でもなく本音で、しかもそれが最大の遺言だったことを、僕は気が付かされてしまった。

お祖父様の遺言が、もしこれを意味するのであれば。そんなことを考えると、嫡木家の狂信が見えてくる。

「何か難しいことを考えているみたいだけど、どこをどう振ったところで、瑞穂ちゃんがエルダーにふさわしい、可愛くて綺麗な女の子である事実は一切揺らぎは無いのにや」

奏ちゃんと由佳里ちゃんが認めるまりやの一言が、僕の懸念をすべて肯定していた。

容赦を知らないまりやが嫌い。

命を無くした母様が嫌い。

優しい紫苑さんが好き。

ばいばい。

あとがき

ごきげんよう、菅野たくみです。

「処女はお姉さまに恋してる」の、ちまたにあふれている二次創作小説の一つに目を通していただいてありがとうございます。

この小説は、「少年は掲示板に恋してる」の別解として、小説の形で「2ちゃんねる風おとボク」を追求したものの一つです。ギャグ設定とシリアスストーリーの影に、どれだけの数のネタが潜んでいるのか、数えてみていただけたら本望です。

今回、最初のネタとして、幸穂さまと瑞穂きゅんの掛け合いというコンセプトを思いついたのは、前回の「おボクさまが見てる？」で売り子をしているときでした。幸穂さまの話で一子ちゃんがからまないものを、何一つとして見ていなかったからです。

そんなことを、その当日、偶然となりのサークルだった宇王音古さま（せみらぶ）にちょっと話したのがスタートでしたが、その後、幸穂さまが瑞穂きゅんをいじるというシチュエーションでは、ページ数が明らかに不足するということに気が付きました。

そんなことを考えていると、神様が降り立ちます。おとボクを初めてプレイしたひとの感想に、「パッケージの、黒髪のほう（紫苑さん）が男だと思ってた」とありました。それに関連し

て、数日後おとボクチャットで私が「紫苑さまが男でも問題なし」と無意識のうちに言い切っていたり、バレンタインネタで家名さま（恵女OG）が紫苑さまがマキユーシオな格好良さを生かすネタを書いていた。

紫苑さんが男の娘（デフォルト変換）だったら……？

このアイディアから生まれたのが、学生時代の慶行さんでした。

その一方、奏ちゃんがすでに「見破っていた」という考えに関しては、あれだけ抱きつかれてるなら逸物絶対気づかれてるだろ、という考察に依ります。タック（屹立を体の中にしまい込む技術）を年中しているのは生殖能力の問題がありますし、あれだけ立派なものをしまい込んでいるのが苦しくないはずがない（笑）。

というわけで、せつかく「幸穂さま」という原作破壊マシンを準主役抜擢しているのですから、世界観をあえて壊しながら主張するのも手だろうと、思い切ってこの形を取りました。

最後に、表紙カバーの印刷をしていたいただいたさま（えめらるど ふろつじょん）、直前にプリンタが壊れ、印刷と製本の肩代わりをしていたいただいたQ turnさま（Quotation mark）、完成を応援してくださったみなさま、そしてこの本におつきあいいただいたみなさまへ。

どうみてもみなさまのご助力あつての作品です。

本当にありがとうございました